

巻頭言

# 若者から学ぶ 地域づくりのとりくみ —地域と出会い、「しごと」が生まれる

高橋 薫 (NPO法人文化学習協同ネットワーク/協同総研理事)

人とかがわれない、先が見通せない

私たち文化学習協同ネットワークは、不登校の居場所(フリースクール)、働くことを学ぶベーカーリーや農場、地域若者サポートステーション、生活困窮事業、基礎自治体の教育・福祉の居場所、ITの職場づくりなど、学校外の場で活動を広げてきた。現場に訪れる子ども・若者たちは、人とかがわることに苦勞している。さらに、時代の課題とも言えるであろう、将来の見通しの持てなさが力を奪っているようにも見える。そこに貧困や孤立などといった問題が積み重なり、パワーレスな状態が深まっている。

## 居場所の学び合い機能

むさしのサポステには年間600人(実人数)の若者やその親が訪れる。ほぼ全員が上述のような状態であり、ここ数年は居場所にもコンスタントに通ってこれないような「動けない」人が目立つ。まずは面談で状態を丁寧に聴き取り、ニーズを具体化していく。本質的なニーズはコミュニケーション欲求(自己承認欲求)であることが多く、活動ができそうであれば法人が運営する居場所につなぐ。

居場所では、自由に語り合う場やもの

づくりの場、地域から仕事をもらってきて集団でやる場、居場所でしたいことを持ち寄る場など、さまざまなとりくみが若者たちによってつくられている。ここでは、サブカルチャーの話ではなく、「いま・ここ」でのことが話題になることが多い。そのなかで参加者の思いや葛藤に出会い、「ひとりではない」という感覚や「自分もそうしてみようかな」という次への準備に入っていく(モデリング)。だから、居場所は参加者が行き交う場でなければならない。他者あるいは自分が抱える困難や課題に出会い、展望を探っていく余白(時間と空間)、そして語り合う文化が欠かせない。これはオンラインでは難しい。

## 居場所と地域を結ぶ

若者の欲求は相互に刺激し合い広がり、居場所の外を意識するようになる。しかし就職活動やアルバイトをはじめてもまだ居場所に通ってくる。働きはじめて時間が合わないメンバーたちが語り合う夜の会もある。コロナ禍でも好評だったのは吉祥寺の個人商店を経営する方たちとの茶話会だ。一見吉祥寺に出店するアグレッシブな人のように見えるが、じっ

くりと話を聴いてみると、自分たちと同じように葛藤や不安のような感覚をもつ人たち。そこに、魅力を感じるようだ。

もうひとつ、地域の単身高齢者にパンを届けるといものが最近人気だ。法人が運営するコミュニティベーカリー「風のすみか」の高齢のお客さんがパンを楽しむにしているというエピソードから生まれた。最近是在宅支援センターとの連携も深まり、介護施設にも出張販売するようになっている。地域で必要とされていることを、ひとりではなく仲間とともにやるということは、若者のニーズにもマッチしている。また、周辺的な参加もたくさんあるというのがポイントだ。事前準備や片づけ、ついでにベーカリーの手伝いなど、やれる範囲でかかわっていくことができる。誰がどんな役割を持つのか、やってみてどうだったか、次はどうするかなど、日々のふりかえりは欠かせない。やりがいが見えてきたら責任も持つようになっていく。

### 学び合いの居場所を地域に広げる

昨年、地域のとりくみを居場所のすぐ近くで豊かに展開するということをテーマにしてきた。地域づくりのテーマを共有してきた近隣住民数名が呼びかけ人となり、地域のキーマンになりそうな人に声をかけ「コモンズ in 三鷹・武蔵野」という会が立ち上がった。コミュニティオーガナイズング、三鷹市スクールコミュニティ構想、建築デザインから見る地域づくり、住まい支援、武蔵野市子ど

もの権利条例、外国人支援など、地域に根差したテーマでゲストを招き、語り合う。スタッフが複数参加し、現場の若者たちにも議論を伝えている。

そして、協同総研の「地域づくり講座」も開催した。協同労働法施行後、さまざまな分野で協同労働の職場が立ち上がっていることが紹介され、足元の三鷹地域では何ができるだろうかと語り合う。この6回にわたる講座には、若者の居場所のメンバーが2人参加した。子育てを終え就職を考えた女性が、既存の仕事の枠に当てはまっていかなければならないような現状に遭遇し、違った働き方はないものかと語った。若者たちはこれを聴いて「私たちと同じだ！」と喜び、それを目の当たりにした女性も感激した。

講座の中では、量り売りの店「野の」との出会いもあった。自分たちの身の回りから世界を変えようとしている姿は、若者たちにとって希望につながるものだった。そして、そんなつながりの中で働き・生きていきたいという願いも生まれた。この1月から、「野の」が提供するキッチンに週1回、「風のすみか」の若者たちが出店することになった。

地域の課題は若者の課題でもある。まずは周辺的にでも地域に参加することで、エネルギーを蓄え地域づくりの主体となっていく希望が見えるかもしれない。こうした取り組みを仕事として位置付けていくような仕組みがあると良いのだが。ともあれ、私自身も、地域のなかに出ていかねばと改めて思いなおしている。